

平成21年6月1日～6月30日の意見

## 群馬音楽センターの今後と議論の進め方

### 『変遷』

戦後まもなく、高崎に誕生した音楽集団（後の群響）の活動が評価され、昭和31年に群馬県が「音楽モデル県」として、当時の文部省から指定を受けた。これを機に青年会議所をはじめ、様々な団体が「音楽センターの設立促進大会」を主催した。以後この趣旨に賛同し設立運動は全市にひろがった。昭和34年1月、高崎市議会で総工費2億9千5百万円の建設案が可決した。しかし、当時は国をはじめ地方自治体も財政は厳しく、高崎市も同様であった。もちろん市民の生活も苦しい時代でした。

高崎市は約3億円の財政計画のうち、1億円を市民・企業からの寄附金を充てることとした。（1世帯平均1200円 約3千万円・企業等より7千万円）

当時の1200円は高卒初任給の約1割強にあたる。ちなみに、人口は約137,000人、29,000世帯である。当時市の予算は約8億円そして、昭和34年着工、昭和36年7月竣工となった。総事業費3億3千5百万円、市民待望の「群馬音楽センター」がここに誕生した。総工費の約30%が市民の浄財で賄われたのである（時の市民、之を建つ）。

昭和36年 1961年を記念して1960席と1つのステージとした。なお、高崎市はこの事業を市制施行60周年記念事業と位置づけていた。

### 『現状』

平成20年12月、市の広報紙で竣工後約50年を迎え、老朽化から生じる様々な課題を、特集を組んで市民に伝えパブリックコメントを募った。（時の市民 之をどうする）。

### 『音楽センターの課題』

- 音楽ホールとしての音響性能（残響）
- ステージと観客席の狭さ
- 楽屋の機能と数
- トイレの数と形状
- 空調機能
- バリアフリー対策
- メンテナンスの困難さ
- 耐震性その他の安全対策
- 維持管理、補修費の増大
- 年間稼働日数の凋落傾向

### 『今後のシミュレーション』

- 現状のまま補修を重ね使用する（延命）

現状のままで大規模改修する

現在のホールはそのまま残しモニュメントと位置付け、新ホールを建てる

現在のホールは使用内容を市の関連行事や各種吹奏楽等に使用し、新ホールは別の場所を建てる

壊して、(1) 今の場所に音楽専用ホール (2) 今の場所に多目的ホール

壊して、(1) 別の場所に音楽専用ホール (2) 別の場所に多目的ホール

壊して、外観などのイメージを残しながら新ホールを建てる、等

### 『新ホール建設に伴う議論のスタンスと留意点』

単に建て替えれば済む問題ではない。音楽センター建設の背景や歴史には、時の市民の想いがつまっている。群響の活動、歴史と共に歩んできたことや、日本の近代建築にあって特に高い評価を得ている。さらに大切なことは、ホールに求めるモチーフ（中心思想）のスタンスを残響や使い勝手、設備の内容などの数値からのみ判断するのはどうかということ。私たち自身が20世紀型価値観の物差し、判断基準を見直す必要はないだろうか。現在の市民が試されている。そのためにも高崎市民（県民）が現在のホールに対し、どのような認識を持っているのか、どのような意思の発信がなされているのかを、様々な手法を駆使しあらゆる機会を捉え把握しなければならない。

実際のところ、この種の課題（いわゆる箱物）を議論する際によく取りざたされる民意の声、つまり市民の盛り上がりや誰が演出するのか。とても大切な要因である。行政主導なのか、群響関係者なのか、クラシックファンか、建築関係者か、利用団体か等、少なくとも基本は市民主導でなければならない。

つまり、現在のホールを残すにしても、新しいホールを建てるにしても、主役は高崎市民（県民）である。老朽化に伴い年々増加する維持管理費、補修費等の財政負担、あるいは建て替えの財政負担にしても市民（納税者）の理解が不可欠であるからである。どちらにしても、『今後のシミュレーション』に基づいた財政推移や財政計画は、極力情報公開すべきである。50年前の「ときの市民」の決断は、無から有（之）、を創り出すエネルギー。現在の「ときの市民」の決断は、有（之）の意志をどう受け止め、どのように継承し、次の世代に渡すことができるか二重のエネルギーが必要とされる。

### 『その他』

考慮されるべき課題…現在の高崎市は県内最大の自治体であること（37万人、県内人口の約19%、県内一の交通拠点）、さらに県民会館（現ベイシア文化ホール）についても築後約40年等々ふまえたとき、新ホールは市単独で考えるより、むしろ県、市の共同のステージと捉えたらどうだろう。留意点の項であえて「高崎市民（県民）」と表記したのもこの為である。さらに群響とホールとの位置づけや関連からも「県」が前面に出る必要はないだろうか

私は音楽センターは絶対に存続させてほしいと思っています。

歴史的にも価値のあるこの建物は残していかなければと思うのです。

音響、老朽化、バリアフリーの点など、問題点はあるとは思いますが、それは新しく建てたとしても、また何十年後かには同じ理由が発生するのではないのでしょうか。

ただ、音楽センターをそのまま残すのであれば、群響があるこの街に、別の場所に新しい音楽ホールを建設しなければと思います。

壊すのは簡単です。でも壊してしまったらもう2度と元には戻りません。

今まで日本人は、自然も含めていったいいくつもの大切なものを失ってきたでしょうか。日本中どこに行っても、ここはどこだろうと見間違えるほど同じような駅や街並み……。

高崎駅もあんなに趣のある素敵な建物だったのに、せめて東京駅のような利用の仕方もあったはずです。

資金面の問題もあるとは思いますが、私にしてみれば、東口の2階の連絡通路建設も別になくてもいいと思いますし高崎市文化会館を建設する時に、県民会館のように大ホール、小ホールともう少し規模の大きい施設を作ることだってできたとも思いますし、シティーギャラリーに併設するホールも、もう少し大きくして作ることだってできたはずです。

音楽センターの問題は今に始まったことではないのですから……。

### 音響問題についてのみ書かせて下さい。

音響が悪いという評価がこの問題を複雑にしているようです。

確かに今の音響は悪いです。でも昔はよかった。もっと響いていましたし、ステージの上から客席に音が伸びていくさまが実感できました。客席からは、独特のやわらかい音が、音像の定位もよく、余計な残響もなく、奏者の意図が手に取るように判りました。

これらは、改修のたびに悪くなり、現在のようになってしまったのです。まず、この責任を明らかにしてください。老朽化の前に音響を壊した犯人がいるのです。

そして、音を元に戻し、設備を直し、存続させるべきです。

音さえよければ、取り壊すなんて言う発想は起こらなかったはずです。楽器だって、音が良ければ、オールドとして追い求める人はいるのです。

最近の残響の長いホールは全くいいとは思いません。風呂場です。残響が混じり合って、音楽の本来の姿が見えません。にじんだ水彩画のようです。あんなものがもてはやされるようになってから、日本のオーケストラは下手になってきたと思います。

かつての音楽センターの響きが最高だと思います。

私は自分の興味のあるアーティストであれば、都内はもちろん、地方のホールにまで足を運びます。

残念ながら、音楽センターで行われるコンサートは、減多に行きません。

理由は音響がどうにもならない程悪いからです。

設備においては、特にトイレの数が無い。長い列を避けるために、センター外に出るとは、各地ホールでは考えられないことです。

コンサートは日常を離れての、ハレのことです。

ホールに足を入れるだけで、ワクワクする。席に着く時の嬉しい緊張感。当たり前にもホールの雰囲気にあって欲しいものです。

ホール内のビュッフェも楽しみの一つです。

何よりも、アーティストがこのホールで演奏をしたいと思う音響。

音楽センターは歴史的建造物に、捕われ過ぎです。

改築をしているのですが、音響は悪くなる一方。外身を守るために、中身を捨てたかの

ようで残念です。

お金を出して行くからには、魅力あるアーティストを呼べる会場、納得できる演奏。演奏を支えるための音響。確保してほしいです。

高崎市民文化会館の音響は及第点です。

残念なのは駅から遠く、遠方からのお客を呼ぶのに不便。車で行っても、駐車場が不十分で、不足を補うための駐車場は遠く、不便を感じます。

シティホールは駅近で、駐車場も十分ですが、多目的のホールなので、反響板もなく、音が拡散してしまい、ベーゼンドルファーのピアノが宝の持ち腐れに…。

せっかく、高崎五夜等プログラムに力を入れているのに、とにもかくにも音響が残念、残念、残念です。

魅力あるホールは音響に尽きます。

アーティストがレコーディングをしたいと思うようなホールを望みます。

意見・要望は、手紙・ファックス・Eメールで送ってください。個別の回答は予定していませんが、今後も寄せられた意見・要望は集約し、広報高崎・ホームページなどを通じてお知らせしていきます。

お問い合わせ先

〒370-8501 群馬県高崎市高松町 35 番地 1

広報広聴課

027-321-1205 027-328-2726